

キングズレイ ホール異聞

(精神医療13巻3号, 39頁~45頁, 1984)

1 キングズレイ・ホールの歴史

キングズレイ・ホールの歴史を語るには、まずD・クーパーのヴィラ21から始めなければならぬだろう。

クーパーは⁴⁾は、ロンドンの北西にある2000床のシェンレイ精神病院の中のヴィラ21で、「理想的な精神医学的共同社会を創出しよう」とした。ヴィラ21の中のかつてのインシュリン病棟を使って、まずはマクスウェル・ジョーンズ流の「古典的な」治療共同体に近い形のユニットとしてスタートした。このユニットは19床で、「患者は15歳から20歳代後半までの男子であった。3分の2以上は精神分裂病と診断され、その他は青年期の情緒的危機あるいは人格障害というラベルをあたえられていた」。

その目的は、クーパーが精神病院の中で直面した3つの基本的要請を満たそうとしたことにある。第1は、彼らには「より儀式的でなくて、しかも固定的でない役割構造をもつ独立したユニットが必要であり、...そこでは他者との関係を通して自分自身に出会い、自分達の葛藤をよりうまく処理することができると思われた」ということである。

第2には、「精神分裂病、より一般的には青年期障害について集団や家族の相互関係の研究をするために、適切な研究の場がとりわけ必要だった」ということである。

第3には、「普通の生活ができる小さな自律的ユニットの原型を確立する必要があり...まず大きな精神病院の中ではどこまで変革が可能なのか、その限界を調べることであり、次に、起こり得る困難と矛盾に目を向けて、その評価を基にして将来の計画をたてることであった」。

このヴィラ21での実践内容や、再入院率の低さなどについては、クーパーの前掲書に詳しく述べられているのでここでは省略するが、あくまでこれは、精神病院内の一病棟での薬物療法と家族療法を併用した「治療共同体」の域を出ていない。クーパーは、ヴィラ21の報告の章を次のように締めくくっている。「さらに前進するためには、究極的に、精神病院を超えて共同社会へとステップを踏み出さねばならないのである」。

クーパーの試みは1962年1月から1966年4月まで続けられた。(どういうわけか笠原は9)「1962年から1年半つづいた」と述べ、ひどく値切っている)

クーパーがヴィラ21を去る約2年前の1964年頃、彼ら、すなわち、D・クーパー、R・D・レイン、A・エスターソン、S・ブリスキンたちは、どのようにして「精神病院を超えて共同社会へとステップを踏み出すか」を模索して、毎週集まってはディスカッションしていた。

(これから私が述べるキングズレイ・ホールをめぐる話は、断りのない限りシドニー・ブリスキンから聞いたものである。彼はファミリー・ワーカーで、キングズレイ・ホール共同体の事務局長的な役割をも果たしていた人である。彼とは、私がロンドン滞在中に全く偶然に国立美術館の喫茶室で知り合い、以後何度か彼の家で飲みながら当時の話を聞かせてもらえることができた。)

彼らは、時には徹夜で議論し、精神病院に替わる場所で、「患者」みずからの力で立ち直れる所はないかと考えあぐねていた。レイン言うところの¹⁰⁾「人間の挫折を修理する一種の工場である精神病院のかわりにわれわれに必要なものは、ずっと先まで旅をした人が、したがって精神科医や他の正気の人たちよりも道に迷っているかもしれない人が、内的時空に<さらに>踏み込み、再び帰って来る道を見出すことのできる場所」(筆者改訳)を探していたのである。

ところが、そういう場所はなかなか見つからなかった。そしてある日、いつものごとく夜中まで話し合っていた時、突然ブリスキンは、自分でも思いがけず「俺の家でやってみないか」と言ってしまった。まさに言葉が勝手に口をついて出てしまったという感じであり、彼は帰る道々「自分もついに気が狂ったのではないか」と思い、それからの1週間というもの「自分は大変なことをしてしまった」とものすごく悩んだそうである。しかしいったん言った以上は実行に移すことに決め、当時クーパーがいたシェンレイ精神病院のコミュニティ・ミーティングで志願「患者」を募った。かくしてブリスキンの家で共同生活が開始された。この時に彼が出した条件は、第1に、記録(メディカル・レコード)はとらないこと。第2に、自分のことは自分ですること(但し彼に手助けを求めることはかまわない)。第3に、彼の書斎と寝室以外は共同利用できること。以上の3つだけであつた。

ブリスキンにとって最も苦しかったのは、干渉しないことであつたという。彼ら3人は、ブリスキンには全然あいさつもせず、全くその存在を無視し、しかも真夜中に電気掃除機を使ったり、煙草の吸殻をジュータンの上に遠慮なく捨てたりという状態で、全く精神病棟の生活そのものであつた。しかし、そこで口を出してしまえば「母親の役割」を演じてしまうことになると考え、彼はじっと我慢して黙っていた。この頃がブリスキンにとっては最もつらく、とんでもないことを始めたものだと後悔した時期に違いない。しかし、ある晩、事態は急転回することになる。夜の10時頃、3人のうちのひとりが初めてブリスキンに口をきいたのである。「今からパブにビールを買いに行くが、おまえの分も買って来ようか」という。「イエス」と答えると、「つまみも買って来ようか」ときく。再び、「イエス」と答えた。するとしばらくして帰って来て、ビールやいろいろな食べ物を食堂のテーブルの上に並べ、3人とも集まって来た。そこで彼らが言うには、「3人のうちの1人に職が見つかったので、これからそのお祝いをするのだ」と。それ以後、彼らとブリスキンとの関係や家の中の雰囲気は一変し、残る2人も次々に職を見つけ、その後2人はブリスキンの家を出てアパートに移った。そういう形で、誰かが出て行くと、再びシェンレイ病院から志願者を募るということをして、ブリスキン宅での共同生活は続けられていった。

もちろんそこでは「治療」は行われなかつたので、「精神病」の「症状」のために近所の人たちとのトラブルを引き起こす時が遅かれ早かれやって来ることになる。たとえばブリスキンの家は、ちょっとした芝生の広場を半円状に囲んで何軒かの家が連なっているうちの1軒であるが、ある日、伝統的精神医学で言うところの「緊張病」の人が、その芝生の上で一日中、奇妙な「常同姿勢」を保ち続けた。当然のことながら、その芝生に面する10軒ばかりの家の住人の注目をいやでもひいてしまう。そこでブリスキンは、一軒一軒個別訪問してまわり、自分たちのやっていることを説明していった。その時、彼は相当の非難を覚悟していたのだが、意外にも近所の人たちは暖かい反応を示し、そのうちの何人かは自分の親戚にも「精神障害者」がいるといった打ち明け話を始めたりしたそうである。

その後も、警官に保護されたりすることもあったが、その都度、根気よく説明し理解を得ていった。ブリスキンの話では、こういう近隣対策を行う時には、まず個別訪問で十分に説明し理解してもらった後で近隣の人たちに集まってもらい集会をもつ方がうまくいくそうである。

自分たちの目指していることが自宅で実行可能ということは、この地上のどんな場所でも実行可能だという確信を抱き、ブリスキン宅以外にもその場所を探し続けた。そして約1年後に同じブリスキンが2つ目の場所としてキングズレイ・ホールを探し当てたのである。

キングズレイ・ホール、ロンドン東部（概して住民の社会階層は低い）のコミュニティ・センターであり、かつてガンジーがインド独立を英国政府と交渉した時に滞在していたところでもある。設立者のミュリエル・レスターが、ブリスキンやレインたちの趣旨に賛同して強力に支持してくれたため、キングズレイ・ホールの理事会は、1970年5月まで、そこをフィラデルフィア協会に貸す契約を結んだ。

しかし残念なことに、貸借期限が切れる前に、かなり強力な支持者のミュリエル・レスター（かなりのおばあちゃんだった由）が死んでしまったために、理事会に支持者を得ることができず、貸借契約の更新ができなかった。したがって、キングズレイ・ホール共同体自体は、1970年5月に解散することになった。しかし、当時すでにロンドンには他にも同様の共同体が3カ所あり、私がブリスキンに会った1981年5月の時点でもいくつか存続していた。おそらく現在もなお続いている共同体、新しい共同体が存在してしると思われる。

2 キングズレイ・ホールは失敗だったのか

キングズレイ・ホール共同体がどんなものであったか、そのなまなましい記録はメアリー・バーンズとジョゼフ・バークとの著書²⁾に詳しい。バークは、その書の日本版への序文の末尾に次のように書いている。「キングズレイ・ホールはうまくいったのか？ もちろん、これは不適切な問いだ。私たちは何も損なわなかったし、＜治療＞もしなかった。キングズレイ・ホールとは、そこで何人かの人々が長く忘れ去ってしまい歪んでしまっていた自己白身と出会ったひとつの場所であった。運良く、時を得て、人々は己れの心の鼓動を聞き、そのリズムを明らかにすることができたのだろう。W. H. オーデンの詩“Unknown Citizen”を連想させるこの答がすべてを語っていると言えよう。否、これは質問に対する単なる答ではない。成功か失敗かという問題設定とは全く次元を異にしている。成功か失敗かという問は、＜治療＞という思考の枠組みにとらわれきった問だからである。そんなことはレインたちの著書や論文を少しでも読めば明らかだろう。

ところで誰かの著作を翻訳するということは、訳者がその著作を理解した上で、世の人々に紹介するに値すると判断した上で行われるものではなからうか。ということは、当然ながら翻訳者は原著者にも大いに興味を抱き、故人でもなければ一度は会ってじっくり話をしてみたいと思うのではないかと、私などは考えるのであるが、笠原嘉はその点ちょっと違うらしい。もちろん笠原せんせいも、レインの一連の著作を翻訳して、私どもにも読めるようにして下さったことに関して、私は感謝の意を表明するにやぶさかではない。しかし彼が「R. D. レイン氏」と題して⁶⁾、次のように書いているのを目にすると、ちょいと首をかきあげたくなる。「R. D. レイン氏との付き合いも随分長くなった。ただし付き合いといっても、彼の何冊かの著書の翻訳者という、ただそれだけのことであって、実際に会ったこともなければ文通したこともない。(中略)私の関心は彼の著作にあって彼の生身の姿の方には

ないから、さしあたり彼に会う気持ちはないのだが、それでもその魅力は翻訳者として知っているつもりである」という具合に笠原は書き始めて、「だが、もし今レイン氏に会ってみたいかといわれたらどうするだろうか。私はやはりやめておくだらう。他意あってではない。一般的にいて人に遭うことのむつかしい時代だと思うからである。絶対的帰依、心からの尊敬、同年輩者間の堅い握手、それも残念ながらわれわれの時代の図柄ではない。いましばらくレイン氏との関係を翻訳者としての付き合いにとどめておくつもりである」と何とも言い訳がましい筆の置き方をしている。

私には、笠原のこういう語り口は陰険だと思えない。彼は、これまでたびたびレインの分裂病論を「社会共謀因説」と「分裂病旅路説」という考え方で整理して紹介し、彼らの実践であるキングズレイ・ホール共同体についても紹介している⁹⁾。ところがその紹介のしかたにはなかり問題があり、笠原の翻訳者としての中途半端な姿勢、あるいは悪くとればその陰険さが如実に表れている。すなわち、当初はキングズレイ・ホールを「一種の宿泊施設」という言い方で比較的正しく紹介しておきながら⁵⁾、その後「実験病棟」⁶⁾、「小治療施設」^{6,8,9)}という表現を用いるようになる。しかしレインたちは、キングズレイ・ホールを決して「治療施設」であるとか、「実験病棟」であるとかいった言い方はしておらず、「共同体 (community)」とか「家 (household)」と呼んでいる²⁾。あるいは1969年の「フィラデルフィア協会報告書」の中では¹⁵⁾「キングズレイ・ホールはるつぼ (melting pot, crucible) である」という表現を使っている。以上のことからだけでも明らかなように、キングズレイ・ホールとは、決して「実験病棟」でもなければ、「小治療施設」でもない。たしかにクーパーのヴィラ 21 は「実験病棟」であったかも知れない。しかしプリスキンの家や、キングズレイ・ホールは、明らかにそれを乗り越えた「場所」であった。それが当時の伝統的精神科医にとってどれほど衝撃的な場所であったかを聞くと、今となってはいささか意外な感すらおぼえる。一例をあげると、前述のごとくクーパーのヴィラ 21 は、マクスウェル・ジョーンズの唱導した「治療共同体」理念から出発して、おそらくその延長線上で運営されたものと考えてよからう。今では我が国でもその名の知られているマクスウェル・ジョーンズは、フィラデルフィア協会のアドバイザーの1人であったが、プリスキンの話によると、彼が初めてキングズレイ・ホールで「患者たち」と同じテーブルと一緒に夕食をとった時、プルプルとふるえて何も食べることができなかったそうである。ジョーンズの「治療共同体」は、所詮<治療>共同体であって、治療者と患者との間のヒエラルヒアをできるだけ縮小しようとはしたものの、決して<治療者>と<患者>という枠組みは取り払えなかったのである。彼の限界については、すでに小澤が明確に指摘している¹⁴⁾、ここではこれ以上言及しない。

再び笠原の問題に戻ろう。彼は次のようにも書いている⁶⁾。「ヴィラ 21 だってキングズレイ・ホールだって結局うまくいかなかったではないか」と。

いったい何を根拠にこのような見てきたような嘘を書けるのだろうか。おそらくすでに述べたような彼の翻訳者としての姿勢の当然の帰結なのであろう。もっとも、その3年後に出した『生の事実』の訳者あとがきでは⁸⁾、少しニュアンスが違ってはいる。「キングズレイは成功だったのか失敗だったのか..。ともあれキングズレイはその役割をおえたようだ。しかし、真面目にレインに取り組めば、そのような疑問が出てくるはずはないのである。ところが笠原には、レインと文通する気もなければレインに会う気もないのだから、どんなことを訳者あとがきで書こうとお構いなしなのだろう。レインには訳者あとがきは読めないだろうし..。結局、原著者も訳書の読者もいいツラの皮ということになる。

それでも百歩譲って、あえて成功か失敗かをもう少し笠原にも分かりやすく検討してみよう。もちろん「小治療施設」というような見方しかできない人だけが、このような問いをするのであろうが、それに対する答は、すでにいくつか出されている。ひとつは、M. パーンズとJ. パークとによる記

録であり²⁾、もうひとつは、キングズレイ・ホールに関する統計資料である¹¹⁾。これは1965年6月1日から1970年3月31日までのものであるが、この4年10ヵ月の間の全滞在者は119人、そのうち「患者と分類されていたもの」は75人、キングズレイ・ホールから直接精神病院に入院した者は4人、キングズレイ・ホールをいったん出てから入院した者は8人、合計は12人であるが、入院歴のない人でキングズレイ・ホールにいた間あるいはいったん出た後で初めて入院した者は皆無であった。そして『フィラデルフィア協会報告暫1965～1969』¹⁵⁾によると、「自殺者は出なかった」となっている。

しかし、しつこいようだがキングズレイ・ホールは「治療施設」ではない。もちろん、ここに滞在しながら他所で精神療法を受けたり、精神安定剤を投与してもらったりすることは、全く住人の自由であった。だからキングズレイ・ホールの中では<治療>や<投薬>などは行われなかったが、たとえばレインやエスターソンたちが、自分のクリニックでキングズレイ・ホールの住人を<治療>することはあったし、それはそれを受ける人たちの自由に属することであった。

とは言うものの、キングズレイ・ホールの中でも<治療>に関わることが問題となったことはある。プリスキンの聞くことのできたエピソードを2つばかり紹介しよう。

<エピソード1>

これは、『狂気をくぐりぬける』²⁾の中にも出てくる話であるが、メアリー・バーンズが極限まで退行し、拒食が続いて生命が危ぶまれたことがあった。プリスキンの話は本の中に書かれていることとは若干異なるのだが、ついに「医師たち」は経管栄養を考えるとまで追いつめられる。というのも、キングズレイ・ホール共同体が始まってからまだ間もない頃だったので、死亡者(しかも餓死者!)が出るということは大変なスキャンダルとなり、そうなるとキングズレイ・ホールの存続が危ぶまれるからである。何度も話し合いが行われた。ついにある晩、夜明け前になって突然レインが、「結局われわれは皆自分たちの不安についてしか考えていない。メアリーの話を話してはいるが、本当にメアリーのことを考えているのではない。それならそれでわれわれの本心を正直に伝えよう」と言い出し、レインがメアリーの枕元へ行って、彼らの不安について、つまりこのままではメアリーは死ぬのではないかと不安でたまらないこと、そしてもし死ぬようなことがあればせつかくの共同体がつぶされるおそれがあること、だからどうしても食事をとってほしいということを正直に打ち明けた。それ以後メアリーは、食事をとるようになったということである。

<エピソード2>

レインが一度だけキングズレイ・ホールの住人に精神安定剤を投与したことがある。伝統的精神医学で言うところの「躁病」の人がやたら国際電話をかけまくり、その費用が莫大なものになった。もちろん本人には払えない。考えられることはすべてやってみたがどうしても事態を解決することができなかった。最後にはさしものレインも勘忍袋の緒を切ってしまう、その住人の口に精神安定剤をほうり込み、ポケットに金をねじ込み、タクシーに押し込んで「どこへでも好きなところへ行け!」と追い出したということである。

さて、この2つのエピソードは対照的である。しかし、結局はどちらも「病者」と関わる人間の不安の問題である。この種の不安については次節で再び触れることにして、『生の事実』の訳者あとがきの中の笠原の問いに戻ってみよう。「キングズレイ・ホールは成功だったのか失敗だったのか」。やはりこの問いに答えるには、先にあげたパークのことばをもってするしかないと思う。笠原にそれが理解できないようなら、これ以上少なくともキングズレイ・ホールについて言及するのはやめたがよい。

3 薬についての若干のコメント

前節の2つのエピソードからもうかがえるように、「精神科医療スタッフ」が「治療」を行わず、特に「精神安定剤」を使わずに「患者」と呼ばれる人たちと共に生活することには、相当の不安がつきまとう。

われわれ「精神科医」は、「患者」の「病氣」を治すためと信じて薬を使っている。しかし「病氣」を治す。あるいは「病状」を軽減するためと単純素朴に考えて処方箋をきっているようであり、その実「患者の不安」よりも「われわれの不安」を軽くするためにやっていることがしばしばある。

レインが駆け出しの精神科医だった頃をふり返って次のように書いている¹²⁾。「患者の内部にある種の生が芽生えた時、おそらくそれは泣いたり、しくしくすすりあげたり、叫んだり、悲鳴をあげたり、あるいは就眠時間にベッドに着かなかったり、起床時間に起きかなかったり、食事の時間に食べに来ななかつたり、等々といったことであるが、そのような場合に私はよく病院の宿直から注射をうつよう要請された。医師は、少なくとも病院のスタッフにうるさく言われなないためには、患者に注射をうつ以外に手がなないではないか、とよく考える。注射をうつことを必ずしも非常に喜んでいる訳ではない。」

私自身の過去を振り返ってみても、同じようなことをしばしば行ってきたことは間違いない。時間的にも空間的にも心理的にも体力的にも、「患者」の不安・攻撃性・不眠等々に最後までつき合い切れななかつた時、ということはその後のつき合いを押しつけられる看護者の不安が極度に高まるということであるが、そういう時にとる手段、それがすなわち精神安定剤の増量である。「薬をふやしておいたから（あるいは注射をするから）、大丈夫だろう」というセリフを「患者」にではなく「看護者」に残して、何度か病棟から立ち去ったことを思い出す。

パークは³⁾、「何故、精神医療の中で薬を使うのか？」と問い、次のように答えている。「第1に、誰かが何かをしたり考えたり、あるいは何かをしななかつたり考えななかつたりするために苦痛をおぼえる他の人たちの緊張を軽くするためであり、第2に、薬を製造し販売し投与する人たちの幸せのためである。」「患者」の不安を軽くするための投薬は、現実には、「患者」を取りまく人々（医者・看護者・家族・地域住民等々）や「国家」の不安を軽くするための投薬とうまくすり替えられていることを押えておかななばならない。

W. S. アプルトンは¹⁾、「クロールプロマジン 1500mg / 日以上を投与されている患者25人の記録を調べ、大量急速投与をもたらす最も重要な理由として、第1に患者の攻撃性、第2に患者と病棟スタッフの不安にうまく対処できない医師の経験不足をあげ、このような急速大量投与をスノー現象（snow phenomenon）」と呼んでいる。

私はかつて、大学病院精神科、過疎地の公立総合病院精神科（3看護単位で開放率約7割）、同じく過疎地の町立総合病院精神科（1看護単位で全開放）の3カ所で働いたことがある。その3病院を比較すると、開放率が高い病院ほど、そして医者の数が少ない病院ほど精神安定剤の1人当たり投与量は驚くほど多かつた。私にはまだ薬を完全に手放すだけの自信はなない（やはり不安なのだ！）。しかし、ここであらためて、「薬物は治療の中核とは到底なり得ぬばかりでなく、闘いを抑圧し、この本質を隠蔽することが多いと知るべきである。つまり、過渡的方針としては薬物をいかに使用せぬか、いか

に減量していくかが多くの場合，妥当な方針となりうるであろう¹³⁾」という小澤のことばを肝に銘じておかねばならない。

4 再びキングズレイ・ホールにもどって

プリスキンは，自宅での「患者」との共同生活の中で，不合理な家族的脈絡を極力排除し，「母親の役割」を演じないように努力した。しかしキングズレイ・ホールでは，たとえばメアリー・バーズをめぐる共同体住民の動きは，やはりそのような不合理な脈絡を排除することがいかに困難であるかをよく示していると思う。「分裂病」という属性付与を行わない場所としてキングズレイ・ホールはあったわけだが，家族のメタ文脈を十分には乗り越えきれなかったのではなからうか。しかし，プリスキンがいみじくも語ってくれた「私の家でできたのだから，地上のいかなる場所でもできるはずだ」ということばを嘔みしめる時，精神病院でのわれわれの治療活動は，あまりにもみみっちいものに思えてしかたがない。

文献

- 1) Appleton, W.S. : The snow phenomenon: Tranquilizing the assaultive. *Psychiatry*, 28, 88, 1965.
- 2) Barnes, M. & Berke, J. : *Mary Barnes Two Accounts of a Journey Through Madness*. 1971.
「狂気をくぐりぬける」(弘末・宮野訳). 平凡社, 1977.
- 3) Berke, J.H. : *I Haven't Go Mad Here*. Penguin Books, 1979.
- 4) Cooper, D. : *Psychiatry and Anti-Psychiatry*. 1967.
「反精神医学」(野口・橋本訳). 岩崎学術出版社, 1974.
- 5) 笠原嘉 : レイン「経験の政治学」訳者あとがき, 1973.
- 6) 笠原嘉 : *精神科医のノート*. みすず書房, 1976.
- 7) 笠原嘉 : レインの反精神医学によせて. *臨床精神医学*, 5, 675, 1976.
- 8) 笠原嘉 : レイン「生の事実」訳者あとがき. 1979.
- 9) 笠原嘉 : 反精神医学. 現代精神医学大系第1巻B所収. 中山書店, 1980.
- 10) Laing, R.D. : *The Politics of Experience and The Bird of Paradise*. 1967.
「経験の政治学」(笠原・塚本訳). みすず書房, 1973.
- 11) Laing, R.D. : *The Politics of the Family*. 1969.
「家族の政治学」(阪本・笠原訳). みすず書房, 1978.
- 12) Laing, R.D. : *The Facts of Life*. 1976.
「生の事実」(塚本・笠原訳). みすず書房, 1979.
- 13) 小澤勲 : 反精神医学への道標. めるくまー社, 1974.
- 14) 小澤勲 : あたりまえの生活への闘い - 「治療共同体」批判 -. *思想の科学*, 1977年2月号.
- 15) Philadelphia Association Report (1965 - 1969). 1969.